

「日本・ブルガリア外交関係再開５５周年を迎えて」
＝「日本友の会」年次会合での小泉大使による講演＝

両国の外交関係の歴史は国交樹立後、１９３９年に相互に初めて公使館を開設して始まり、１９４４年９月、ブルガリアにおける共産党政権成立により一時外交関係を中断しましたが、１９５９年９月に外交関係を再開しました。両国は両大戦で敵対関係になったことがなく、伝統的に良好な関係を有しています。

この５５年間の両国間関係のランドマークとなる出来事は、あまりにも多くあり過ぎてその全てに触れることは無理でしょう。また、年代を追って概要を網羅的に説明しても皆様も飽きてしまいますので止めておきたいと思います。そこで、幾つかの鍵となる数字を示して、この数字との関係において私なりの印象や関係の特徴についてお話ししてみたいと思います。

先ず最初の数字は「１９７０」です。おわかりのとおりこれは数字ではなく暦年です。１９７０年に日本の大阪で初めて万国博覧会（Ｅｘｐｏ）が開催されました。その時以来、１９７５年の沖縄、１９８５年の筑波、１９９０年の大阪、２００５年の愛知と日本で開催された計５回の万国博覧会の全てにブルガリアは参加してくれました。その事実自体が、ブルガリアが日本との関係を大切に考え、友好関係促進に努力してきた証ではないかと考えています。特に１９７０年の万博はブルガリアにとっても歴史的に初めて参加した万国博覧会であると承知しています。昭和天皇皇后両陛下はブルガリア館をご訪問になり、当時珍しかったヨーグルトを召し上がり、おかわりをされたとのエピソードが残されています。因みに日本で「ブルガリア」の名称がついたヨーグルトが発売されたのは、それから３年後の１９７３年のことになります。今やその名前は日本中で知られています。

そして、１９７０年の大阪万博に合わせて当時のジフコフ首相が訪日されました。この時以降、同首相のイニシアティブもあって、ブルガリアは日本との関係は各分野で急速に拡大していくことになります。１９７０年と言えば東西冷戦の真っ只中にあった時期です。トドル・ジフコフ氏については、歴史的に批判や非難があることは承知していますが、殊日本との関係に限れば、同氏はその発展に貢献した功労者の一人であったと言えるでしょう。勿論、日本側においても、ブルガリアとの関係促進に積極的であった方々が多くいます。例えば日本ブルガリア経済委員会の初代の会長であった今里廣記氏などはその一人といえるでしょう。

また、この歴史に象徴されることは、両国間には、東西冷戦の最中であれ、体制転換の激動期であれ、ブルガリアがＥＵの加盟国となった現在においても、一貫して「友好的な関係」が存在し続けてきたという事実です。これは、お互いの国民が政治体制の違いを超えて、互いの国、文化そしてそこに住む人々に敬意を払い、お互いに親近感を持ち、そして好意を寄せてきたからに他ならないと思います。それは、所謂社会的地位や、分野など

に関わらないことに注目したいと思います。日本とブルガリアの関係が様々な分野で発展しつつあった1979年には、現在の天皇・皇后両陛下が皇太子・同妃両殿下としてブルガリアをご訪問されました。今もこの日本大使公邸には、皇太子・同妃両殿下がブルガリアの民族舞踊を楽しそうに踊られている写真が展示されています。その後も我が国皇室からは1987年6月三笠宮同妃両殿下、1996年9月清子内親王殿下、さらに2009年には秋篠宮同妃両殿下もブルガリアをご訪問され、暖かい歓迎を受けています。このように日本の多くの皇族がブルガリアを訪問され、ブルガリアに強い親近感と友情の念を持たれているということも象徴的な出来事でしょう。

一方で別の一つの事例も紹介したいと思います。日本のAFSという団体が、毎年ブルガリアを含め世界各地から高校生を6週間程度日本に招待し、各地のホーム・ステイ先に宿泊して様々な交流を行うプログラムを持っています。ブルガリアからも毎年数名がこのプログラムにより日本を訪問しており、大使館もその実施に協力しています。そのAFSの関係者によれば、こうした世界各地からの高校生を受け入れてくれるホーム・ステイ先を探すのに毎年苦労するそうです。しかしながら、何故かブルガリア人の高校生の人気が非常に高く、「受け入れたい」という家庭が多いために断るのに苦労するそうです。多くの場合、日本のホームステイ先の家族とはその後も交流が続いているそうです。この事実は、ごく一般の人々の間で、世代や置かれた環境を超え、日本人とブルガリア人が相互に好意を抱くことが多い事実を物語る典型的な事例と言えるでしょう。それは何故か。ここではそれを論じることが目的ではありませんので、ご出席の皆様にもその理由を考えていただければ幸いです。

次に鍵となる数字として指摘したいのが、「42」という数字です。この数字は何だと思われますか？ これは大使館で把握している両国の大学や研究機関間などで結ばれた学術交流協定の数です。この中には2年前に結ばれた日本学術会議とブルガリア科学アカデミーの間の交流協定も含まれています。これらの交流協定を通じて、ソフィアのみならず、プロブディフ、ヴァルナ、ヴェリコ・タルノヴォなどに所在する大学や研究機関と日本の25に及ぶ各地の大学や学術機関の間での学術・教育交流が実施されてきました。今もソフィア大学ではこうした協定に基づき、東海大学、創価大学、福山大学の学生が学んでいます。また、5月に訪日したポポヴァ副大統領は、やはりソフィア大学との協定がありブルガリアから一人の教授が派遣されている明治大学で講演をされています。私が何故このことに触れたかと言いますと、こうした交流は普段はあまり目立つことがなく、注目されることも少ないと思いますが、実はこうした着実な交流が両国関係を支える基盤となると考えるからです。特に留学生の交流は、その成果が出るまでには時間はかかりますが、将来的にそれぞれの国の様々な分野で活躍し、友好関係を結ぶ「橋」となる大事な存在です。実際に個人名は出しませんが、今も日本やブルガリアで活躍するかつての留学生の方々を何人も知っています。私は、日本人であれ、ブルガリア人であれ、そうした方々の益々の

活躍をいつも尊敬の念をもって見守っております。

そして教育交流と切っても切れないのが、文化交流です。文化交流がいかなる国同士の間でも重要であることは、論を待たないところでしょう。私は、文化と教育の両方が車の両輪となって共に発展する時、それがあつた一国であつて、また国家間や国際社会であつて、そこに住む人々の幸福と平和を実現できる基盤ができるのだと考えています。そのことは、ブルガリアでも日本でも、また両国の関係においても同様でしょう。その意味で私は、この講演をするに当たり、ブルガリア、日本双方で様々な分野での交流に功績のあつた方々への叙勲者名簿を見てみました。その中には文化・教育交流に尽くされた民間の方々の名前が多く見られました。ブルガリア国から叙勲された方々を、年代順に幾つかのお名前だけを挙げて、松前重義、園田天光光、黒川紀章、池田大作、池田恒雄、松前達郎、猪谷晶子、等々、皆様も耳にされてきたと思われるの方々のお名前が見られました。本日出席の方々の中にも、後ほどお話いただくブラティスラフ・イヴァノフさんなど、両国間の文化・教育交流に貢献され日本国から叙勲された方々が何人もいらっしゃいます。もちろん叙勲された方々のみが文化・教育交流の促進を担ってきたわけではありません。ブルガリアでも日本でも、文化や教育の分野で両国間の交流を自らの意思で積極的に進めてこられた多くの個人や団体があります。そうした方々や団体があつてこそ、ここまで両国間の友好関係が幅広くかつ強固なものに発展してきたのだと思います。

その文化交流という点で大事な鍵となる三つ目の数字を挙げたいと思います。これも不思議なことに先ほどと同じ「42」です。この数字は何か。今回の「日本友の会」総会に私が招待した「友の会」会員を含む関連団体の数です。皆様も良くご存じの通り、「友の会」には、日本の文化、芸術、スポーツなどに親しんだり、交流を促進することを目的とした諸団体が多く含まれています。その活動の幅広さや熱心さには、私も常々驚き、感動と尊敬の念を覚えています。今や、この「友の会」所属の諸団体の活動こそが、ブルガリアにおける日本との文化交流の核であるということが出来るでしょう。バシカロフ会長とジェコフ事務局長のご指導の下、これからの益々の発展を期待したいと思います。特に最早伝統行事となつた「日本文化月間」については、本年で四半世紀の節目となる第25回目を迎えますが、ここ数年は「日本友の会」との共催で実施しています。6月23日には、日本で著名な華道家である假屋崎省吾氏とブルガリアで人気の高いヴァイオリニスト、ヴァスコ・ヴァシレフ氏をお招きし、生け花とヴァイオリンのコラボレーションによるオープニング・セレモニーを多くの来賓を得て開催いたしました。本日出席の皆様の中にもこの行事もしくは更にこれに続く假屋崎氏の生け花展に参加いただいた方々がいらっしゃいます。また、バシカロフ会長には、ご祝辞をいただきありがとうございました。

さて、外交関係再開55周年を迎えた日本・ブルガリア両国関係については、これから60周年、70周年そして100周年と、これから更に発展を期していかなければなりません。そこで大切なことは、両国関係の更なる発展を担うべき後進の育成であると思いま

す。現在の青少年の世代に将来を託すしかありません。現在ブルガリアにおける日本語学習者は1, 400人を超えていると言われますし、また、文部省の国費留学生もこの20年で460人を超える数となっています。こうした若い世代から様々な分野でこれからの両国関係の発展を担う人材が育ってくることを期待したいと思います。私自身も、また私の妻も同様ですが、地方都市を含めできるだけ多くの青少年と会い、語る機会を作ってきましたし、また、これからも作ってきたいと思っています。そうした出会いや、語らいの中から将来の人材の芽を育てていきたいと考えております。どうか、「日本友の会」の皆様にも、それぞれの分野で後進の育成に意を用いていただければ幸いに存じます。

ご静聴ありがとうございました。